

又しても、孔子の弟子に関するお話です。植田先生の論語のお話の近くに載せて頂くのは、ちょっと気がひけますが、中国の小さい子供向けの本の中に出て来るお話ですので、弟子たちの説明なども、少々の違いはお許しいたきます。

「孔子には、二人の愛弟子がいました。一人は顔回、もう一人は子貢と言いました。

ある時、齊の国が魯の国(孔子の故国)を攻撃しようと準備を始めた時、孔子は魯の国の窮状を救うために、直ちに子貢を魯に派遣しました。子貢は、孔子に仕事を命じられたことを光栄に思い、東奔西走して、周りの国々と交渉を重ねて、魯の国を重大な危機から救いました。

しかし、孔子の目には、子貢と顔回を比べると、まだまだ大きな差があるように見えるのでした。それで、孔子はわざと子貢に訊ねました。『お前と顔回では、どちらが賢いと思うかね?』すると、子貢は礼儀正しく答えました。

『それは、顔回先輩が、私などよりずっと賢いに決まっています。先輩は一を聞くと、十のことにまで考えが及びますが、私などは、一を聞いて、やっと二のことに思い至るだけですから』

と答えました。孔子は、それを聞くと大きくなすきながら、

『私もそう思うよ。(顔回は本当に賢い)』

と言うのでした。

意味の説明は、「ほんの少しのことでも知ると、そこからとても多くのことを理解することが出来ること。類推する能力にたけていることの形容。」となっています。

例文は、「劉さんは、とても優秀な警察官で、長年の経験から、一を聞いて十を知る類推の力を発揮して、多くの難事件を解決へと導いている」と出ています。

この言葉は、日本でも、そのものズバリ「一を聞いて十を知る」として、よく使われる言葉です。6月号で紹介した「举一反三」(物事の一角のことを聞いたら、残りの三角を類推して、物事の全容を理解するべきだ)と同

じように、孔子にまつわるお話ですが、先に出て来る「举一反三」より、今回の「聞一知十」の方が、ストレートで分かり易いですね。どうして「举一反三」の方が先に出て来るのでしょうか。

何れにしても、4・5歳の幼児向け本に、いくら名門小学校「お受験」用の本だと言っても、このような言葉が次々と出て来るのには驚かされます。日本の「お受験」の経験は無いのですが、このようなことは教えないだろうと勝手に想像して驚いています。

中国は文字の国で、文字一つ一つに意味があるので、文字を教える時には、バラバラに教えるよりも、四字成語のようにしっかり組合わさって、ストーリーのあるものの方が教えやすいのでしょうか。それにしても、教育対象となる幼稚園児と、言葉の意味の深さのギャップには驚くばかりです。

今回のお話に出て来る孔子の弟子は、顔回と子貢ですが、二人とも、弟子の中で優れた十人という意味の「十哲」に数えられています。顔回

は、孔子が自分の後継者にと考えたほど優秀な弟子でしたが、32歳の若さで死んでしまい、孔子に天への恨み言を言わせています。それほど期待していたのでしょう。また、子貢は弁が立ち、史記や春秋左氏伝などの歴史書にも、外交の面での活躍が記載されているようで、今回のお話もそんな中で語られています。

ネット上には、孔子はもとより、沢山いる弟子たちの名前や、性格、何をしたかなど、事細かに出て来ます。孔子と言ひ、その弟子たちと言ひ、ざっと2500年も前の人達のことがこんなに詳しく語られるのは、やはり、中国が文字の国で、記録が好きな民族だからでしょう。

お陰で、隣国日本の様子が中国の歴史書に記載され、大事な研究資料になっているばかりでなく、我々一般の人間も、中国の長い長い歴史の中の出来事を、お話として楽しむことが出来ているのです。文字とは、本当に有難いものです。



満
柏
君代